

特集

子どもの排尿・排便

特集にあたって

排泄に悩みを抱える子どもが その子らしく生きていくことができるために

10年以上前のことです。筆者は皮膚・排泄ケアを担うなかで、小学校高学年のAくんと出会いました。Aくんは慢性便秘で腹部膨満と嘔吐により他院に受診し、その後、原因検索のために当院へ紹介され、検査目的で入院となりました。口数は少なめでしたが、得意な工作の話になるととてもよく話をしてくれました。検査では、原因となる疾患は見つからず、内服薬と浣腸で対応することとなりました。

病室を訪れると、Aくんはぼつりぼつりと家や学校での様子を話してくれました。Aくんは便秘を繰り返す、時々便で下着を汚してしまうこともあったそうです。父親からはそのことで度々叱られていたことなど、淡々と話してくれました。面会には父親が来るのが多く、眉間にしわを寄せながらAくんに指示している様子が印象的でした。入院中、Aくんが少し物事へのこだわりが強かったり、時間など言葉で伝えても忘れてしまったり、目を見て話すことが少なかったりする様子がみられました。そこで、小児外科の主治医と話して、両親に承諾を得たうえで、神経科へ受診することになりました。その結果、Aくんは発達障害の診断を受けました。両親へ検査結果が説明されました。説明後に父親の表情が初めて穏やかになったことを覚えています。父親は、「ようやくわかりました」とおっしゃいました。続けて、「何度同じことを言っても、聞いているのか聞いていないのかわからない。何度も失敗を繰り返す。なんでだろう、なんでだろうと、ずっと思っていたんです。だからか…」と話しました。

その後、退院を数日延長し、作業療法士や臨床心理士と相談しながら、両親だけでなくAくんに、今後の治療や体調管理に必要な知識を指導しました。便秘に関する病態はアニメーションで示し、浣腸や内服薬の説明にはイラストを用いました。また、時間は時計の

絵でスケジュールを示し、生活習慣を見直しました。退院後、Aくんと父親はとても表情よく外来へ受診しました。排便コントロールもでき、下着の汚染もなくなりました。父親は「やっとこの子への対応がわかった。大丈夫です。うんちのほうもちゃんとやれてるよな?」とAくんに話しかけ、Aくんがわずかに照れ笑った顔が印象に残っています。

本特集では、排泄障害をきたす先天性疾患などの器質的な障害のない子どもたちに焦点を当てた「排泄」についてまとめています。排泄に関する問題は、子どもにとっても家族にとっても日々繰り返される困り事です。一方、毎日のことで、表面化されにくい問題であるため、タイミングを逸すると相談窓口につなげることさえ難しくなるリスクもあり、その結果、子どもの心身の成長・発達や家族関係にさえ影響が及ぶ可能性があります。それを回避するためにも、若手の看護師や排泄管理の経験の少ない看護師が、排泄で困っている子どもたちやその家族を目の前にした際に、看護師として症状や子どもや家族の困り感に「気づき」、「必要な情報をとらえる」ことができ、「総合的に考える」ことができ、他職種とともに「チームとしてアプローチできる」ようになるきっかけとなってほしい願いを込め、本特集を企画しました。

一人でも多くの看護師が、排泄管理に関心をもって介入できるようになることで、一人でも多くの子どもがその子らしく生きていくことができるための一助になれば幸いです。

長野県立こども病院第2病棟師長
／皮膚・排泄ケア認定看護師
山崎紀江 Yamazaki Toshie